

日本社会学会 ニュース

発行：一般社団法人 日本社会学会

〒113-0033 東京都文京区本郷 7-3-1

東京大学文学部社会学研究室内

tel 03-5841-8933 fax 03-5841-8932

<https://jss-sociology.org/>

email:jss@sociology.gr.jp

編集責任者：檜村愛子・赤川学（庶務理事）

2023.08.21

No.239

I. 本年度大会について

1. 日本社会学会第96回大会開催にあたって…2
2. 研究活動委員会からのお知らせ ……2
3. シンポジウムの概要 ……2
4. 国際交流委員会企画テーマセッション
“Transnationalism in Context of Crises” について ……5
5. 国際発信強化委員会企画テーマセッション「海外の
学会大会報告者が語る国際発信の重要性」について…5
6. 倫理委員会企画テーマセッション「社会学者と
しての倫理を再考する——倫理綱領・研究指針の
改正を通じて」について…5
7. 社会学教育委員会企画テーマセッション「質的デー
タのアーカイブ」について ……6
8. 招待講演について ……7
9. 報告要旨および大会プログラムのweb公開に
ついて ……7
10. 会場までの交通案内 ……7
11. 会場における機器使用について ……9
12. 大会当日の昼食について ……9
13. 大会時の託児サービスについて ……9
14. 書籍展示について ……10

II. 理事会からのお知らせ

1. 役員候補者選挙（理事選挙・監事選挙）結果
報告 ……12

III. 各種委員会等からのお知らせ

1. JJS編集委員会からのお知らせ（JJS33号から
原則として紙媒体を廃止します） ……13

IV. 学会事務局からのお知らせ

1. 代議員選挙結果の繰り上げについて…14

V. その他のお知らせ

1. 第18回日本社会学理論学会大会（9月2日～
3日）の開催について…15

I. 本年度大会について

1. 日本社会学会第96回大会開催にあたって

この度、第96回日本社会学会大会の開催を立正大学（品川キャンパス）にてお引き受けする運びとなりました。歓迎いたしますとともに、誠に、光栄に存じます。昨年に引き続き、対面での開催でございます。新型コロナウイルスが5類に移行されましても、まだ完全に収束した状況ではありませんので、感染対策も引き続き行っていく所存でございます。

本大会では、会員のみなさまや若手研究者の方々との交流や研究の一層の刺激となりますよう、円滑な開催に尽力したいと存じます。

本学は、全国からのアクセスがよく、校舎もコンパクトです。ただ、建物や教室番号はやや複雑な作りとなっておりますので、ご不便をおかけするかもしれません。社会学科は、現在11人の教員で構成されており、開催時には、大学院生や学部学生もサポートさせていただきます。

本学は、昨年創設150周年を迎え、来年度は社会学科の所属する文学部は創設100周年を迎えます。社会学科は、理論と実証の双翼を担ってまいりました。ウィズコロナの時代には、伝統と志を同じくする仲間の存在を有難く、そして、学会の大会も一期一会の出会いであると感じております。

それでは、みなさまとお目にかかれまします日を、教員一同心よりお待ち申し上げます。

日本社会学会第96回学会大会実行委員会
委員長 小浜 ふみ子

2. 研究活動委員会からのお知らせ

委員会が7月16日（日）に開催され、今年度大会（第96回）について以下のことを決定しました。

- (1) タイムテーブルを決定しました。
- (2) シンポジウムの詳細が決まりました（「3. シンポジウムの概要」参照）。
- (3) テーマセッション（一般研究報告Ⅲ）は、17部会が開かれることになりました。
- (4) 研究活動委員会企画シンポジウムは、2部会が開かれることになりました。
- (5) 自由報告（一般研究報告Ⅰ）とポスターセッション（一般研究報告Ⅱ）に「ゆるやかなセレクション」を実施しました。
- (6) 自由報告（一般研究報告Ⅰ）の司会者候補を決めました。

3. シンポジウムの概要

今年度大会のシンポジウムは、研究活動委員会企画の2部会と、日本学術会議共催シンポジウムの1部会が開催されます。シンポジウムの詳細は下記のとおりです。

【1】ポストパンデミックの社会学教育

このシンポジウムでは、新型コロナウイルス（以下、COVID19）の感染拡大が日本の社会学教育に及ぼした影響を振り返り、今後の社会学教育の展望や課題について論じていく。

2020年1月に日本国内でCOVID19の感染者が確認され、2020年の4月からは、都市部を中心に多くの大学で対面授業が制限された。2021年ごろからマスク着用のうえ三密をさけた対面授業が増えていったように思う。さらに2023年5月にCOVID19の感染症法上の位置づけが2類から5類に移行したことによって、マ

スク着用等の義務付けがなくなった大学も多いと思う。それでは感染が拡大する前の状況に大学は戻ったのだろうか。もしもそうでない部分があるならば、戻ることにはできるのだろうか、あるいは、戻すべきなのだろうか。対面授業制限の影響は特に調査実習で大きかったのではないだろうか。調査実習では、学生・教職員間の接触だけでなく、調査に協力する様々な人々との関わりが生じるからである。いくつかの授業実践報告によれば、実習の中止、期間短縮、合宿せずに通いでの実習、対面でのインタビューを避け、オンラインでの聞き取りやオンライン・サーベイの実施など、さまざまな取り組みが模索されたことがわかる。このような影響は、現場での体験を重視する教員や学生にとって特に甚大だったと思われる。実習の意義として、学生が現場でさまざまな体験をすることから得られる、気づきや学びの重要性を強調する教員は少なくない。COVID19で、このような学びや気づきはすべて剥奪されてしまったのだろうか、それともオルタナティブな学びが得られたのだろうか。

COVID19によって、学生の授業以外の大学生活も様変わりしただろう。アルバイト、クラブ・サークル活動、その他の交友関係など、さまざまな側面での変化が生じたと思われる。これらについても、具体的にどのような変化が起き、そしてCOVID19の5類移行にともなって、以前の状態に戻ったのか、戻っていないのか、そしてそれが社会学教育に及ぼす影響はどのようなものだろうか。

以上のような問題を考えるために、3人の話者に報告をお願いした。第一報告者の岡本先生は、2020年3月にSNS上で大学教員向けに教育・研究等のための知恵と情報を共有するためのコミュニティを立ち上げられた方で、そこで得た情報や経験から講演をしていただく予定である。第二報告者の中西先生は日本社会学会社会学教育委員（2019-21）実態調査ワーキンググループや大学での量的調査の実習経験を踏まえて、量的調査の観点から大学教育の変容について論じていただく予定である。第三報告者の天田先生も、同ワーキンググループの経験及び、質的調査の実習経験を踏まえ、ご講演いただく予定である。

・報告者とタイトル

1. 岡本仁宏（関西学院大学・名誉教授・非会員）「新型コロナ対応互助FBグループの経験から：何が変わり何が変わらなかったのか、そして何が明らかになったのか」
2. 中西祐子（武蔵大学）「コロナ禍で大学での学習はどのように変容したか」
3. 天田城介（中央大学）「ポストパンデミック時代における社会学教育実践と社会調査実践をめぐる困難」

- ・コメンテーター：望月美希（静岡大学）茂木謙之介（東北大学・非会員）
- ・司会：太郎丸博（京都大学）、塚田穂高（上越教育大学）
- ・研究活動委員会担当委員：小川和孝、田中慶子、太郎丸博、塚田穂高

【2】社会学における「因果」：方法論横断的対話を目指して

社会学において因果関係の特定、あるいは「因果」を厳密に検証するということは、長らく「難しい」問題として避けられてきたように思われる。他者理解としての「記述」の重要性の指摘など、(因果的)「説明」よりも「記述」を重視する傾向が強かったのではないか。しかし近年、例えば統計的手法の発展などの影響もあり、「統計的因果推論」は一つのブームになりつつある。あるいは比較歴史社会学における「因果的説明」など、社会学において「因果」を巡る議論が、古典期以来のホットな話題となってきた。ただし、同時多発的に「因果」という言葉が社会学の各所で使われるようになった結果、その複数の「因果」の間の相互理解はなかなか進んでいないようにも思われる。

まず統計的因果推論やそれに準ずる研究では、反実仮想に基づく「因果」関係が基盤にある。このアプロー

チでは、同じ事例に介入した場合の結果と、同じ事例に介入しなかった場合の結果の差から因果効果を導出していく。したがってこれを基準として「因果」関係を求めるのであれば、ランダム化比較試験のように、ほぼ均質な集団を二つ用意し、一つの集団には介入を行い、もう一つの集団には介入を行わず、その差分を検討することになる。つまり、このアプローチを採用する研究では、できる限り均質な集団を比較することによって、介入や処置といった独立変数の影響を導出することを目指している。

しかしながら社会学における「因果」は、均質な集団の比較からのみ導かれているのではない。異質な集団を比較し、「因果」を導く場合もあるだろう。たとえば、性別によって収入が異なるというときには、男性と女性という異質な集団を比較し、その違いを見出していく。すなわちこのアプローチは、異質な集団を比較することによって、従属変数のあり方がどのように変わるのかを提示していると言えよう。

上記の二つのアプローチは、計量的な研究で採用されることが多い。けれども「因果」はその二つのアプローチからしか届かないものなのだろうか。比較歴史社会学のように、少数の事例を詳細に検討することにより、「因果」を導くことはできないのだろうか。あるいはそこで導出された「因果」は、先の二つのアプローチといかなる関係にあるのだろうか。さらには、比較を行わずに、単一事例から「因果」を語ることはできるのだろうか。歴史的に一回限りの事例や、固有性の極めて高い事例からは「因果」をみることはできないのだろうか。

今回のシンポジウムでは、瀧川裕貴先生には計算社会科学の立場から、筒井淳也先生には計量社会学の立場から、朴沙羅先生には生活史・オーラルヒストリーの立場から登壇いただき、それぞれの立場から「因果」について報告していただく。また歴史社会学を専門とする坂井晃介先生に今回のコメンテーターをお願いした。このシンポジウムを通して、社会学において「因果」が何を示しているのか、「因果」という言葉における輻輳の状態を解きほぐすことを目指す。

- ・報告者とタイトル

瀧川 裕貴（東京大学）「理解と説明は対立するか？：因果概念による統一的把握をめざして（仮）」

筒井淳也（立命館大学）「処置のジレンマ：因果推論における意味の問題」

朴沙羅（ヘルシンキ大学）「生活史と因果」

- ・コメンテーター

坂井 晃介（東京大学）

【3】 災禍の時代の社会学（日本学術会議共催シンポジウム）

2011年3月11日、先進国日本を襲った巨大自然災害と福島原発事故は、科学技術によってあらゆる災禍は防御できるという近代主義の確信を、日本だけでなく、全世界において大きく揺るがせた。

そして、2019年末に始まった新型コロナウイルスの感染拡大は、あっという間に世界を覆い、パンデミック化した。各国でなすすべもなく柩が山積みされていく状況がメディアを介して伝えられる一方、人びとは他者との関係性を遮断され、孤立した。14世紀に酸鼻を極めたペスト大流行の悪夢が甦るかのようだった。

追い打ちをかけるように、2022年2月、ロシアがウクライナ侵攻を開始した。それは、市民革命以来、グローバルに共有されるべき理念として掲げられてきた「民主主義」が、あたかも「砂の城」のように崩れ落ちていくのではないかという不安を具現化する光景だった。

このような災禍の時代、私たちはどのように世界に対する信頼を取り戻しうるのか。本シンポジウムは、孤立を超えて連帯する未来社会を多くの参加者とともに見ようとするものである。

4. 国際交流委員会企画テーマセッション "Transnationalism in Context of Crises" について

Sunday, October 8, 9:30 – 12:30

Session 1

- 1) Sardar Ahmed SHAH (Osaka University): Liberal Convergence or Differential Exclusion? Path Dependency in Migration Policy
- 2) Makiko IIO (Hitotsubashi University): Reconfiguration of Transnational Social Space under Gendered and Racialized U.S. Immigration Control: How Gender and Generation Influence the Mexican Indigenous Immigrant Experience across the Border
- 3) Michael MICHAELS (OISE University of Toronto): Making more irregular youth transnational migrants: The complicit role of the industrialized world
- 4) Omid ASAYESH (University of Calgary): Homo Emigraturus: The Rise of Involuntary Immobility in Iran and Its Consequences
- 5) Kaoru SONODA (Hosei University): Japanese firms aiming for transnational management denationalize highly skilled foreign workers in Japan: The importance of rethinking in the Crisis

Sunday, October 8, 15:00 – 18:00

Session 2

- 6) Jacob NIELSEN (Robert Gordon University): Belonging in a Time of Crisis: Transnational Workers in a London Hostel
- 7) Nanase SHIROTA (University of Cambridge): Precarious stepping-stone: Transnational Japanese hostesses in London and their intimate labour during the Covid period
- 8) Ashmeet KAUR BAWEJA (International Rescue Committee India): Hawaii Chappals to Crocs: Social Class Implications of Transnationalism in an Elite International School in India
- 9) Steve ENTRICH (University of Innsbruck): Do institutional contexts matter for social inequalities in study abroad intent and uptake? Evidence from Japan
- 10) Phillip HUGHES (University of Hyogo): Sissy that discourse: Queer migrants in Japan queering hegemonic discourses through drag performance

Session organizers: Akihiro KOIDO, Asia University,
Carola HOMMERICH, Sophia University

5. 国際発信強化委員会企画テーマセッション「海外の学会大会報告者が語る国際発信の重要性」について

登壇者（敬称略）

武内今日子 東京大学大学院情報学環特任助教（トラベルグラント採択者）

「国際学会で日本の性的マイノリティについて報告するー研究の位置づけと報告の場の特徴に着目して」

石橋孝 専修大学大学院文学研究科社会学専攻博士後期課程（トラベルグラント採択者）

「日本の社会学において国際発信・国際化は重要なのか」

今井順 上智大学総合人間科学部社会学科

「国際学会参加の意義——国内学会と国際学会の違いに着目して」

石井クンツ昌子 お茶の水女子大学（進行役兼務）

「海外学会大会における Effective な報告に必要なコトとは何か」

6. 倫理委員会企画テーマセッション「社会学者としての倫理を再考する——倫理綱領・研究指針の改正を通じて」について

倫理委員会ではこの2年間、「日本社会学会倫理綱領」および「日本社会学会倫理綱領にもとづく研究指針」の改正に取り組んできました。会員からの2回の意見公募と委員会での検討を経て、2023年3月18日に理事会で改正が承認され、9月1日より施行されます。今回の改正により、この間の研究方法論の発展はもとより、研究倫理やハラスメントに関する考え方の変化に応じた様々な修正が可能となりました。ただしその一方で、残された課題も少なくありません。そこで本テーマセッションでは改正に関わった委員から、改正案に十分には反映できなかった点も含め、本改正の達成点と今後の課題について報告を行い、会員との意見交換の場としたいと考えています。

第1報告では、今回の改正の全体像を振り返った上で、特に社会調査の倫理に関して、会員からの意見公募や委員会で議論になった点を中心に紹介する予定です。たとえば、同意取得が困難な場合、集団や地域に対する調査結果の影響への配慮、調査結果の公表に際しての事前了解などがこれに該当します。これらの論点に関しては、引き続き議論を継続していく必要があると思われます。続いて第2報告と第3報告では、会員からの意見公募において最も多くの意見が寄せられた倫理審査とハラスメントという2つの話題について個別に取り上げ、今回の改正に留まらず、広い視点から学会として検討すべき点について掘り下げた報告を行う予定です。

倫理の問題は単なる手続きの問題ではなく、「そもそも社会学とは何か」「社会学者はどうあるべきか」といった学問分野のアイデンティティの根幹に関わる論点を含んでいます。ぜひ多くの方に関心を持って頂き、当日の議論に参加して頂ければ幸いです。

テーマ：社会学者としての倫理を再考する——倫理綱領・研究指針の改正を通じて

司会：田代志門（東北大学）

第1報告「倫理綱領・研究指針改正の概要と残された課題」田代志門（東北大学）

第2報告「社会調査と倫理審査——その意義と課題を考える」武藤香織（東京大学）

第3報告「研究・教育活動におけるハラスメント——大学での取り組みの到達点と、具体ケースに対して大学外では何ができるか」北仲千里（広島大学）

7. 社会学教育委員会企画テーマセッション「質的データのアーカイブ」について

司会者・コーディネーター 三井さよ（法政大学）

1. 小杉亮子（埼玉大学）「社会運動の記録を残すとはどういうことなのか——誰が、なにを、どこに、なんのために」
2. 清原悠（立教大学）「社会運動のアーカイブズの活用は何を豊かにするか——新宿「模索舎」の50年史をめぐる調査研究から」
3. 加藤旭人（一橋大学大学院）「アーカイブズの活用の方法論的基盤を探る——東京都立多摩社会教育会館旧市民活動サービスコーナー所蔵資料から」
4. 伊東香純（日本学術振興会 PD / 中央大学）「欧州の大学における社会運動のアーカイブ」

5. 佐藤（佐久間）りか（認定NPO法人健康と病いの語りディベックス・ジャパン）「語りの献血事業としての Database of Individual Patient Experiences (DIPEX)」
6. 山口和紀（立命館大学大学院）「社会運動のウェブアーカイブズの可能性——ウェブ上の記録をいかに後世に繋ぐのか」
7. 川端美季（立命館大学衣笠総合研究機構生存学研究所）「生存学研究所のアーカイヴィングの展望とその課題」

8. 招待講演について

本年度の招待講演は、本年度の日本社会学会奨励賞の受賞者をお招きして講演していただく予定です。詳細については、受賞者が決定次第、さまざまな方法でお知らせいたします。

9. 報告要旨および大会プログラムの web 公開について

本年度大会でも、報告要旨を日本社会学会ホームページ上で公開することにしていきますので、各報告者におかれましてはその旨ご了承ください。

また、本年度大会は、報告要旨集(冊子)の無料配布は行いません。よろしくご了承のほどお願いいたします。

(以上 研究活動委員会 浅野 智彦)

10. 会場までの交通案内

大会会場は立正大学品川キャンパスです。品川キャンパスまでの交通アクセスは、下記ホームページも合わせてご参照ください。

立正大学交通アクセス

<https://www.ris.ac.jp/access/>

Access information in English

<https://www.ris.ac.jp/en/access/index.html>



(羽田空港からのアクセス)

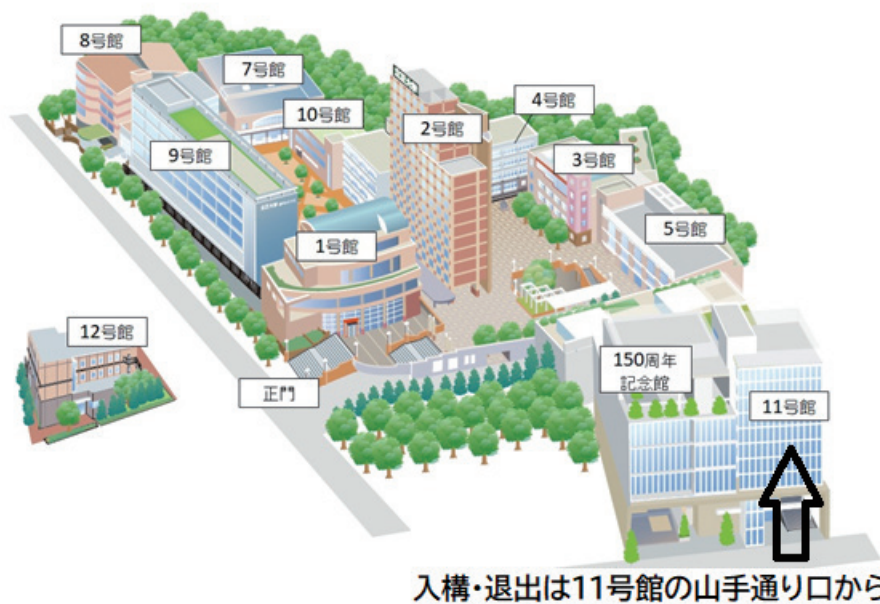
- ・東京モノレールにて浜松町駅へ→JR山手線に乗り換えて大崎駅もしくは五反田駅下車
- ・京急空港線にて品川駅へ→JR山手線に乗り換えて大崎駅もしくは五反田駅下車

(東京駅からのアクセス)

- ・JR 山手線に乗り換えて大崎駅もしくは五反田駅下車

(五反田駅・大崎駅から品川キャンパスまで)

・JR 五反田駅中央改札口、もしくは JR 大崎駅南改札口を出て新東口から、徒歩約5分です。山手通り口（11号館）から入構してください。研究報告部会とシンポジウムは、5号館・6号館・11号館・13号館（150周年記念館）で実施



11. 会場における機器使用について

会場では、プロジェクタとパソコン接続用ケーブル（HDMI ケーブル）を利用できます。利用される場合には各自でパソコンをご持参ください。Apple 社製パソコンを使用する場合には、専用の変換アダプタ（Apple 社純正品以外は接続できない可能性があります）も各自でお持ちください。

DVD に関しては、パソコンで再生できるかたちでご準備下さい。パソコン等を使用する場合には、開始 15 分前に会場にお越しいただき、各報告・セッション参加者と協力・相談のうえ、接続および動作確認をお願いいたします。また、テーマセッション、研究チーム報告のような場合には、円滑な進行を図る意味でも、機器使用について事前に報告者間で連絡・調整をお願いします。

12. 大会当日の昼食について

大会会期中(10月8日・9日)は両日とも、品川キャンパス内で食堂の営業とお弁当の販売はございませんが、トークパレット(5号館・6号館地下1階わき)と7号館2階食堂を昼食用スペースとしてご利用いただけます。

13. 大会時の託児サービスについて

第96回大会では、以下のとおり託児サービスを行います。

【10/8（日）】

① 9:00～13:00 ② 12:30～14:30 ③ 14:30～18:30

【10/9（月）】

④ 9:00～13:00 ⑤ 13:00～17:00

【場所】

立正大学品川キャンパス内

【保育委託先】

「株式会社 空のはね」(<http://www.soranohane.com>)

【利用可能年齢】

生後6ヶ月から小学校6年生まで

【利用料金】

学会からの補助により、利用者負担は1時間あたり1,000円

【連絡事項】

- *お子様の飲み物、お食事、着替え、オムツ、オムツ替えシート、日頃好きなものなど、お子様に必要なものはすべて保護者にお持ちいただきますようお願い申し上げます
- *当日体調を崩されておりますお子さまはお預かりできず、キャンセル扱いとなりますこと、ご了承ください。
- *既往症のあるお子様については、事前の詳細確認時にご相談ください。病名・症状・お医者さまの指示などお教えくださいましたら保育の可否を検討しお伝えさせていただきます。保育に支障のない既往症はお預かり可能ですが、発作が起こります可能性のある既往症をお持ちのお子様は申し訳ございませんがお預かりできません。
- *使用済みのオムツに関しては、会場で破棄する事が出来ない為、保護者様にお持ち帰りいただくお願いをしております。

【申込方法】

下記の予約フォームより、必要事項を入力して予約を確定させてください。予約締切は、8月31日（木）といたします。保育委託先より9月中旬ころまでに折り返し詳細をご連絡いたします。詳細確認へのご返信をもって予約完了とさせていただきます。

<https://forms.gle/FzEJ9TsYHdX9NDts9>

【問合せ先】

託児に関して問合せがありましたら下記までご連絡ください。

《株式会社空のはね 担当：柏木》

電話：03-6417-9735

mail：info@soranohane.com

（

14. 書籍展示について

2023年10月8日、9日に、立正大学（品川キャンパス）にて開催される第96回日本社会学会大会では、例年同様、書籍・雑誌の展示販売コーナーを開設いたします。多くの出版社・団体の皆様にご出展いただき、社会学研究者との交流の機会にご活用いただければ幸いです。

1. 開設日時・会場など

2023年10月8日（日）9時30分～18時（予定）

2023年10月9日（月）9時30分～15時（予定）

立正大学 品川キャンパス 5号館1階 512教室

※ご使用いただく区画の割り当ては、事前に大会運営委員会で決定させていただきます。

※展示スペースは、教室の長机（3人掛け）2台を使用し、2㎡前後のスペースになる予定です。

※出展料として1区画、7,000円をいただきます。

※出展料の支払い方等の詳細につきましては、申し込み後、9月中ごろまでにご連絡いたします。

2. 搬入方法

事前の場合は、以下の指定のとおり、宅配便などにてお送りください。

10月7日（土）の14:00～16:00

〒141-8602 東京都品川区大崎4-2-16 立正大学文学部事務室

第96回日本社会学会大会運営委員会 気付（気付を必ず記載のこと）

あるいは、8日、当日朝に持ち込みにて会場に搬入して下さい。車による搬入の場合、事前に「車両入構申請」が必要になります。車による搬入を希望される場合は、申込時にその旨お知らせください。折り返し、申請書をお送りいたします。当日入構方法等につきましては、申し込み後、9月中ごろまでにご連絡いたします。

3. 当日の受付・設営・管理

出展者は、大会1日目（10月8日）朝に5号館1階511教室にて受付をしてください。宅配便でお送りいただいた箱は、会場となる512教室まで、こちらで搬入いたします。

大会1日目の終了時刻には運営委員会が教室を施錠いたしますが、貴重品などは各自で管理をお願いいたします。両日とも朝は9時（予定）には開室します。

4. 搬出方法

書籍・雑誌等の搬出で宅配便等を利用される場合、宅配業者とのやり取りや伝票の準備等は各自でご対応ください。

大会2日目(10月9日)16時までに発送作業を終了して下さい。

5. 申込方法

出展を希望される出版社・団体等の方は、以下の点を明記の上、メールにて8月31日(木)までにお申し込みください。

宛先メールアドレス：nissha2023shoseki@gmail.com

第96回日本社会学会大会書籍雑誌コーナー担当

記入事項

- 1) 出版社名あるいは団体名、住所、連絡先
- 2) 当日販売担当者名、連絡用の携帯電話番号
- 3) 当日の受付予定時刻(未定の場合は、後日ご連絡ください)
- 4) 予定搬入箱数および輸送方法(郵送で7日か、8日搬入か、また搬入方法)。(未定の場合は、後日ご連絡ください)
- 5) 非営利団体であれば、その旨

以上、第96回学会大会実行委員会 鈴木 健之)

Ⅱ. 理事会からのお知らせ

1. 役員候補者選挙（理事選挙・監事選挙）結果報告

2023年6月19日（月）から6月30日（金）にかけて、今年度選出された62名の代議員の投票により、役員候補者選挙（理事選挙）が実施されました。理事選挙管理委員会が7月15日（土）に開票作業を行い、以下の理事26名と監事2名の当選者を確定しました。

理事は理事会を構成し、当法人の業務を執行します。

監事は理事の職務の執行を監査し、法令の定めるところにより監査報告書を作成します。

今回の選挙で選ばれた役員（理事・監事）の任期は、定款第23条の定めにより、2025年の定時社員総会終了時までとなります。

【監事（定数2）】

有末 賢
玉野 和志

【理事・中京地区選出（定数2）】

樫村 愛子
丹辺 宣彦

【理事・北海道地区選出（定数1）】

平沢 和司

【理事・関西地区選出（定数6）】

奥村 隆
吉川 徹
佐藤 嘉倫
丸山 里美
村上 あかね
森 千香子

【理事・東北地区選出（定数2）】

田代 志門
羽瀨 一代

【理事・関東地区選出（定数12）】

赤川 学
浅川 達人
浅野 智彦
天田 城介
石井クンツ昌子
稲葉 昭英
釜野 さおり
数土 直紀
関 礼子
中澤 秀雄
三井 さよ
元森 絵里子

【理事・西日本地区選出（定数3）】

稲月 正
濱西 栄司
三隅 一人

Ⅲ. 各種委員会からのお知らせ

1. JJS 編集委員会からのお知らせ (JJS33 号から原則として紙媒体を廃止します)

日本社会学会ニュース 237 号 (2023 年 1 月発行) において、Japanese Journal of Sociology 誌の原則オンライン化 (紙媒体の廃止) について会員から広く意見を募集しましたが、オンライン化そのものに反対する意見はありませんでした。この結果を踏まえ、JJS33 号 (2024 年 3 月発行) より「原則として紙媒体の発行を中止する」ことを 2023 年 3 月開催の日本社会学会理事会にて決定いたしました。ただし、関連して以下の 2 点を検討する必要があったため、「ニュース」上でのお知らせを今号まで引き延ばしておりました。その 2 点とは以下のことです。A. オンライン化 (すなわちカラー化) に伴う色覚障がい者等への配慮など「カラー・ユニバーサル・デザイン」の検討が必要というご意見を頂いたこと B. 上記ニュース No.237 では「要望がある会員についてはオンデマンド料金相当額 (2-3 千円程度) を別途お支払いいただければ、紙媒体送付を継続することができる」と記述していたため、この有償オンデマンド料金の設定について財務委員会と協議していたこと。

2023 年 7 月開催の理事会において上記 2 点についても検討の上、以下のように決定されました。

【決定事項】

- 1) 2024 年発行の JJS33 号より、原則として紙媒体を廃止し、日本社会学会会員にアクセス権が提供されている Wiley Online 上での閲覧を基本とする。
- 2) ただし希望する会員については、3500 円 / 号をオンデマンド印刷料として支払えば、紙媒体の郵送を継続することができる。紙媒体有償郵送を希望する会員は、日本社会学会事務局 (jss@sociology.gr.jp) にお知らせいただきたい。
- 3) 色覚障がい等の理由でカラー・ユニバーサル・デザインを必要とする会員については、日本社会学会事務局 (jss@sociology.gr.jp) にお知らせいただければ、無償で白黒印刷のオンデマンド紙媒体を送付する。

ご不明の点等ありましたら、上記の日本社会学会事務局アドレスまでお問い合わせ下さい。

(JJS 担当理事 中澤秀雄・田淵六郎・徐阿貴)

IV. 学会事務局からのお知らせ

1. 代議員選挙結果の繰り上げについて

2023年3月15日（水）から3月24日（金）まで投票の行われた代議員選挙の当選者について、関西地区から次期代議員候補者に当選されていた立岩真也会員が、本年7月31日にご逝去されました。代議員選挙規則第7条8項の「選挙後1年以内に代議員に欠員が生じた場合は、その地区の次点者を繰り上げる」という規程に該当しますので、代議員選挙管理委員会で確認を行い、片桐新自会員の繰り上げ当選を行いました。

2023年から2027年間の代議員62名は下記のとおりです。

（北海道・定数3）

櫻井 義秀
橋本 努
平沢 和司

永吉 希久子
仁平 典宏
野上 元
浜 日出夫

村上 あかね
森 千香子
山田 富秋

（東北・定数4）

片瀬 一男
小宮 友根
田代 志門
羽渕 一代

樋口 直人
藤村 正之
本田 由紀
三井 さよ
山田 昌弘
米村 千代
若林 幹夫

（西日本・定数6）

稲月 正
二階堂 裕子
濱西 栄司
藤井 和佐
三隅 一人
好井 裕明

（関東・定数29）

赤川 学
浅川 達人
浅野 智彦
天田 城介
有田 伸
井口 高志
石井クンツ昌子
稲葉 昭英
小熊 英二
熊本 博之
白波瀬 佐和子
数土 直紀
関 礼子
高谷 幸
田渕 六郎
玉野 和志
出口 剛司
中澤 秀雄

（中京・定数5）

青木 聡子
樫村 愛子
高畑 幸
丹辺 宣彦
早川 洋行

（関西・定数15）

足立 重和
奥村 隆
片桐 新白
金菱 清
川端 亮
吉川 徹
白波瀬 達也
太郎丸 博
筒井 淳也
轟 亮
朴 沙羅
丸山 里美

V. その他のお知らせ

1. 『第 18 回日本社会学理論学会大会』（9 月 2 日～ 3 日）の開催について

『第 18 回日本社会学理論学会大会』（摂南大学大会、ただし、会場は神戸市営地下鉄学園都市駅徒歩 1 分の大学共同利用施設「ユニティ」内会議室）を以下のシンポジウムを含んだ形で、神戸で開催いたします。会場案内および、開催プログラムは下記の学会HP内で公開中です（<http://sst-j.com/?p=1527>）。参加費（一般 3 千円、学生 2 千円）はかかりますが、どなたさまもご参加頂けます。どうぞ奮ってご来場下さい（対面式開催です）。

【シンポジウムテーマ：〈臨んで聴く〉から始まる対話】

9 月 3 日（日）14:00～17:00 大学共同利用施設ユニティ・2 階 セミナー室 4

報告：

貴戸理恵（関西学院大学）

「「つながれなさ」を通じた共同性の可能性——「生きづらさ」を持つと自称する人びとの当事者研究会から」

相良翔（埼玉県立大学）

「「同じ経験」と「違う経験」の狭間に臨む——更生保護施設・重複障害者支援施設をフィールドとして」

伊藤智樹（富山大学）

「「リカバリー（recovery）」の語り難さとピア・サポートの制度化との間で——高次脳機能障害の場合」

コメンテーター：鈴木智之（法政大学）

司会：三井さよ（法政大学）・奥村隆（関西学院大学）

（情報提供者・社会学理論学会大会開催校理事・榎田美雄、kashida.yoshio@nifty.com）